

修士論文（要旨）

2015年1月

男子大学生の「親になる」ことへの肯定的意識とその形成要因

指導 井上 直子 教授

心理学研究科  
臨床心理学専攻

213J4009

高井将洋

Master's Thesis (Abstract)  
January 2015

Affirmative Attitudes toward Becoming a Parent among Male University Students  
and Factors in their Formation

Masahiro Takai  
213J4009  
Master's Program in Clinical Psychology  
Graduate School of Psychology  
J. F. Oberlin University  
Thesis Supervisor: Naoko Inoue

## 目次

はじめに	p.1
第1章—問題の背景と所在	
1.1 父親に関する歴史的背景	p.2
1.2 心理学分野における「親になる」ことに関する研究	p.2
1.3 大学生の育児意識	p.3
1.4 子どもとの接触体験に関する質的研究	p.4
1.5 大学生の「親になる」意識と親になった時の意識の関連	p.5
1.6 まとめと問題提起	p.6
第2章—目的と研究の意義	p.6
第3章—方法	
3.1 研究対象者	p.6
3.2 調査期間	p.7
3.3 調査場所及び面接携帯	p.7
3.4 質問項目	p.7
3.5 分析方法	p.9
3.6 分析テーマ	p.9
3.7 分析焦点者	p.9
3.8 分析手順	p.9
第4章—結果	
4.1 概念	p.10
4.2 カテゴリー	p.11
4.3 結果図	p.12
4.4 全体のプロセス（ストーリーライン）	p.12
4.5 サブカテゴリーごとの説明	p.13
第5章—考察	
子ども好き意識を持つことの重要性	p.23
子どもとの肯定的な接触体験の重要性	p.23
被養育経験と「親になる」ことの関連	p.24
自身の父親像の形成について	p.24
現実的な問題について	p.25
現代の男子大学生の親像	p.26
まとめと今後の課題	p.27
謝辞	p.28

引用文献

付録

## 第1章 問題の背景と所在

現代の日本において、少子化や核家族化、虐待など様々な社会問題が存在しており、その解決案の一つとして父親の育児参加が求められている。厚生労働省はイクメンプロジェクト（2010年より実施）や育児・介護休業法の改定（2010年6月施行）などの政策を行ってきたが、平成25年度雇用均等基本調査（厚生労働省，2014）による男性の育児休業取得率は2.03%と低い数値であり、男性の育児参加が十分に行われているとは言い難い。この原因として、川瀬（2010）は少子化，核家族化，地域社会の崩壊などの原因により，若い世代の身近に子どもと接する機会が著しく減少し，従来，自然に身につけていた「育児の学習」ができていく社会状況にあるといった指摘がある。

しかし、そのような時代であっても「親になる」ことに対して肯定的な意識を持っている男子大学生はどのような人生を歩んできたのだろうか。そのプロセスを明らかにすることは今後男性の育児参加を考えるうえで重要なことであると考えられる。

そこで本研究では、労働といった外的な影響を社会から直接受ける前段階にあり、「親になる」ことを目前に控えた男子大学生を対象とし、「親になる」ことへの肯定的意識がどのような経験を経て形成されてきたかを探索的に描き出すことを目的とする。

## 第2章 方法

調査は、2014年9月から11月にかけて行われた。「親になりたい」と積極的に考えている男子大学生3，4年生を9名対象とし、半構造化面接を実施した。質問項目は、被養育体験や子どもとの接触体験に関する全6項目を用いた。分析はプロセスを描き出すことに適した修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いた。

## 第3章 結果と考察

分析の結果、15個の概念、《自身の成長》、《被養育経験》、《社会的環境》という3個のカテゴリー、【子どもへのポジティブ感情】、【大人への成長】、【親になる意識の芽生え】、【具体的検討】、【被養育経験】、【子どもとの関わり】、【現実問題】という7個のサブカテゴリーが生成された。

本研究から、現代の男子大学生が「親になる」ことに対して肯定的な意識を持ち具体的に考えていくプロセスは、子どもに対してポジティブな感情を持つことから始まり、自身が成長する中で子どもと関わる視点が養育者の目線へと変化し、「親になる」ことを意識し始めること、そしてより具体的に自身の父親像や将来持つ家庭について考えるというプロセスが示された。「親になる」意識を持ち始めるまでのプロセスにおいては、子どもと肯定的な接触体験を持つことが非常に重要であることが示された。また「親になる」意識を持ち始めて以降は、自身の被養育体験を振り返り肯定的に捉え、それを基盤として具体的な検討がなされており被養育体験の重要性が確認された。一方で、将来家族を養っていかれるかといった現実的な問題についても考えていた。

以上より、「親になる」ことに対して肯定的な意識を持つためには、子どもとの肯定的な接触体験を持つ機会や自身の被養育体験について考えられる機会、また子どもが将来自身の被養育体験を肯定的に捉えられるように親側への関わりが重要であると考えられる。

今後の課題としては、現代社会においていかにして子どもとの接触体験を持つ機会を作るかということ、現代の大学生が現実的な問題を乗り越え実際に「親になる」までのプロセスを明らかにすることが挙げられる。

## 引用文献

- 荒谷直美 (2012). 子育てと父親の関係に対する関心の歴史的背景と新しい動き 人間文化研究科速報 (奈良女子大学大学院人間文化研究科) **29**, 181-190
- 福嶋俊 (2012). 高等学校における親準備性を高める教育プログラムの開発—子育てにおける葛藤を題材として— 授業実践開発研究, **5**, 37-42
- 岩治まとか (2009). 大学生における養護性の検討 東京家政大学研究紀要 **49** (1), 133-142
- 金谷有子 (2008). 大学生と幼児との世代間交流の重要性についての探索的研究 埼玉学園大学紀要 (人間学部篇), **8**, 119-127
- 川瀬隆千 (2010). 大学生の親準備性に関する研究 宮崎公立大学人文学部紀要, **17**, 29-40
- 柏木恵子 (1996). 父親の発達心理学 父性の現在とその周辺. 川島書店
- 木村留美子・津田朗子・木村礼・輿水めぐみ・中出清香・竹俣由美子・棚町祐子 (2004). 大学生の親性の準備に関する研究—ふれあい体験とアタッチメントスタイルからみた子ども感— 金沢大学大学教育開放センター紀要, **24**, 9-18
- 木下康仁 (2007). ライブ講義 M-GTA: 実践的質的研究法: 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂
- 小島秀夫 (1989). 乳幼児の社会的世界. 有斐閣
- 厚生労働省 (2009). 育児・介護休業法について  
<<http://www.mhlw.go.jp/topics/2009/07/tp0701-1.html>> (2014年6月24日取得)
- 厚生労働省 (2014). 平成25年度雇用均等基本調査 (速報)  
<<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/71-25.html>> (2014年7月5日取得)
- 水落正明 (2006). 家計の時間配分行動と父親の育児参加. 季刊・社会保障研究, **42**, 149-160
- 溝端奈穂・武藤麻美・桂田恵美子 (2010). 男子大学生の子育ての意識を規定する要因 臨床教育心理学研, **36**, 15-19
- 中澤祐子・星野明子・桂敏樹 (2005). 大学生の育児意識に関する一考察 (研究活動報告3) 京都大学医学部保健学科紀要: 健康科学, **2**: 73-77
- 岡本祐子・古賀真紀子 (2004). 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析 広島大学心理学研究, **4**, 159-172
- 奥田雄一郎・後藤さゆり・大森昭生・呉宣児・平岡さつき・前田由美子 (2010). 大学生における「親になること」と時間的展望 共愛学園前橋国際大学論集, **10**, 187-196
- 小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓 (1998). 父親になる意識の形成過程. 発達心理学研究, **9**, 2, 121-130
- 藤後悦子・岡本エミ子・山本和子 (2005). 保育体験を中心とした教育プログラムの有効性 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, **5**, 57-68
- 全国学童保育協議会 (2014). 学童保育の実施状況調査の結果がまとまる  
<<http://www2s.biglobe.ne.jp/Gakudou/2014kasyosuu.pdf>> (2015年1月3日取得)